

令和5年度新薬剤師養成問題懇談会（新六者懇）、日本病院薬剤師会・資料

「シームレスな卒前・卒後研修の実現に向けて」

・なぜ、卒後研修が必要なのか？

学部で行う卒前の実習は、薬剤師業務を体験することで、薬剤師の業務を知り、役割を理解することである。ノンライセンスの立場であることから、指導薬剤師の監督下のもとに実習を実施するだけでなく、実施可能な業務とそうでない業務が現実存在する。一方、学生の大きな特徴は、実習の目標や課題に取り組むための時間が現場の薬剤師に比べて十分にある。この条件の下に、学生の実習時に培って欲しい能力は、自己研鑽能力、発疑能力、課題解決能力である。さらには、対物・対人業務の別なく、さまざまな課題を見つけ（発疑能力）、学生自身がじっくり考える（自己研鑽能力、課題解決能力）など、思考力を醸成する。また、患者とその薬物治療に向き合うことでコミュニケーション力や医療安全とは何か肌で感じ、医療人として薬剤師としての感性を培うものである。即ち、卒前の実務実習は薬剤師業務を理解し、それらを通して医療人・薬剤師としての感性を磨き思考を身につける場である。

一方、病院や薬局等臨床現場に勤める薬剤師はライセンスに基づいて（社会的責任のある立場で）、患者中心の視点を持ち、個別化医療の実現に向け、生涯にわたり自己研鑽していく必要がある。医療の担い手の一員として、医療機関や地域医療の現場で、薬学の視点を「チーム医療」に反映するための臨床能力を養うことを目的に、薬剤師として基盤形成の時期に研修を行うことが必要であると考えられる。

特に、病棟で担当患者を持った上で、服薬指導や多職種との連携、チーム医療を実践し、医療人としての責任感や使命感を身につけることは、今後の薬剤師に求められる役割の充実化を図る上で基盤となるものと考えられる。

また、医療の高度化、複雑化が進む中、ジェネラリストとして薬物治療のマネジメントができるようにするために、研修期間に多くの業務を実践し研鑽を積む必要があるため、卒後研修は1年間は必要と考えている。

・シームレスな研修とは具体的に何か？

卒後研修の実施にあたり卒前実習との連携及び位置づけの整理が重要である。繰り返すが、卒前は主に実務実習を通して薬剤師を理解し、医療人・薬

剤師としての感性を磨き、思考を身につける。決して、病院や薬局の内規などルールを覚えることが学生の学びではない。卒後研修では、卒前で身につけた感性や思考を活かし各業務を自立して実施することで、チーム医療の一員として個別化医療を目指した薬物治療のマネジメント力を培う。また、卒後研修は独立して行われるものではなく、卒前実習で培われた土台の上で実施されるものであり、本会議では卒前実習・卒後研修の目的や役割を踏まえ、シームレスな研修の実効性に向け議論したい。

・卒後臨床研修を実施してきた中での課題

研修生に対する課題は、思考力不足、基礎学力不足、倫理的思考や利他的感性の醸成不足が挙げられる。これに対して、卒前では、基礎学力の強化、卒業研究の充実した実践、コアカリで示されているプロフェッショナリズム教育の充実をお願いしたい。

卒後研修における薬局・病院に共通の課題としては、施設によって研修の質が統一されていないことである。今年度、厚生労働省から卒後研修のガイドラインが出されるので、質の標準化を期待したい。